年男のこの１年

石狩医師会
鎌田内科クリニック
鎌田　　覺

小生はネズミ年生まれで、北海道医報本誌の１月号「新春随想」に今年の年男に選ばれ『伊勢神宮に参拝』と題して紀行文を寄稿させていただいた。この１年間ネズミにまつわる事件が相次いで、不思議な印象を受けたので、その２～３を書いてみた。

当院の狭い待合室には、開業以来、患者さんの目の保養と癒やしに少しでも役立てばと、金魚と熱帯魚の水槽を置いている。小さな熱帯魚の水槽には主にグッピーを飼っていたが、今年はネズミ年にちなんでミッキーマウスプラティといって、お尻がネズミに似た熱帯魚のオス５匹をアクアリウムから買い求めてきた。半年ぐらいが経ち、赤ちゃんが10匹ぐらい生まれていることに職員が気づいた。産室を買ってきて隔離して育てた。その後、ミッキーマウスはネズミ算式に増え、どうやらメスが１匹交じっていたようで、今は数十匹に増え、大・中・小・赤ちゃんと水槽の中は三密状態が続いている。

次に猫の額ほどのわが家の中庭には、大切にしている「一位」の木がある。その木の下の枝が枯れてきた。今夏は暑い日が続き、暑さのためかと思っていたが、どうやら木の根をかじる動物が居るらしい。生き物の気配が感じられた。毎年、中庭には生ゴミ用に手作りのコンポストが置いてあり、畑の肥料にしている。ある日、コンポストの回りの土に穴が開いているのを発見。蓋を開けると中に30cmぐらいのネズミを発見し、飛び上がって驚いた。草取り鎌を打ちつけるも、ネズミも飛び上がって夏草の中に逃走してしまった。ホーマックから強力殺鼠剤を購入しネズミに喰わせたが、ネズミは土に穴を掘ってコンポストの中に入り込んだ。今度は昔からある金網のネズミ取りを設置、ドブネズミ１匹、クマネズミ２匹、ハツカネズミ１匹を捕獲、駆除した。

さて数年前、わが家の家系図を作成したことがある。その時遊び心で「干支」も調べたところ、娘婿の家族には96歳のネズミ年生まれの父と、今年還暦の婿、その長男で24歳の医学生と、三代に渡りネズミ年生まれがいることが判明した。

さて今年の年末、小生にとっては「青天の霹靂」ともいえる出来事が起きた。「Ｅ型肝炎ウイルスによる急性肝不全」に罹患したのである。医学の進歩と手稲渓仁会病院の先生方の適切な治療により、お陰様で命をとりとめ、今は快方に向かっている。心から感謝している。

年男の小生にとって、今年は良い年だったのか、悪い年であったのかよく分からない。来年のウシ年には新型コロナウイルスが早く終息して、通常の日常生活が戻ってきて、そして良い年になるように心から祈っている。

参考文献「十二支物語」諸橋轍次著（大修館書店）

親バカ

上川北部医師会
名寄市立総合病院
萱場幸太郎

元々私は子供が苦手だった。自我が芽生え、自分の欲望に忠実な時期、つまり乳児期～小児の時期が特に苦手だった。あまりあるエネルギーを全て自分の視線に入ったものに全力でぶつけ、所構わず泣き喚き、傍で親や祖父母が困り果てて立ち尽くしている光景を見ると、他人事ながら背筋がゾワゾワと冷たくなったものだ。もちろん子供の成長にとってそれが好ましいことは理解している。が、どうしても苦手だった。苦手なものは苦手なのだからしょうがない、と思って生きてきた。

私にも子供がいる。もうすぐ２歳になるが、やはりかなり強く自己主張をするようになってきた。気に食わないことがあると、喉から血が吹き出んばかりに泣き叫び、土の地面だろうがショッピングモールの床だろうがゴロゴロと転がり回り、抱っこしても暴れ回って逃げ出し、そうかと思えば抱っこを求めて泣き叫ぶ我が子には、やはりいたたまれない気持ちにはなる。

ところが、不思議と最近、以前ほど心がざわつかない。むしろ微笑ましくすら思えるくらいになっている。他人の子供を見ても、ゾワゾワとした不快感を覚えることがない。その理由はなんだろうと考えてみると、我が子に理由があるのだろうと思う。早い時間に帰宅すると私を飛び跳ねて満面の笑顔で迎えてくれる我が子。自分が眠りにつくまで一緒にいるようにと、「パパも、ママも」といいながら私たちの手を引き寝室に向かうようにもなった我が子。私が仕事に向かうときは背後から悲痛な泣き声と共に送り出してくれる我が子。なんとも可愛い我が子のこの行動に、「子供が苦手」という意識の上から「子供は何て可愛いのだろう」という刷り込みをされているのだろう。我が子は可愛いから、他人の子も可愛く思える。なんとも単純な自分にびっくりしてしまう。

もし、普段の可愛い行動が、子供は可愛いという刷り込みをするための行為だとしたら。子供は恐ろしいほど賢く的確な生存戦略を持った生物と言えるだろう。その戦略にまんまと乗せられた私は、今日も帰宅を急ぐのだった。